

国分寺1976

第4回 「まぼろしの国分寺球場」

国分寺のまち、ひと、自然、歴史などを紹介するポッドキャスト番組、「国分寺レイディオ」は、東京経済大学地域連携センターが制作、運営しています。

こんにちは。ライターの前松佐左衛門です。

シリーズ「国分寺1976」、第4回は、「まぼろしの国分寺球場」というタイトルでお届けします。

それでは最後までお付き合いください。

今回は、「まぼろしの国分寺球場」というテーマで話をしたいと思います。

かつて「東京メッツ」という名のプロ野球球団が東京にありました。

本拠地は国分寺、ホーム球場は「国分寺球場」。

50歳を超えても現役投手として投げ続けている岩田鉄五郎に率いられた、弱小でしたが野武士のような個性的な選手ばかりの魅力ある球団でした。

そして、東京メッツは日本のプロ野球史上初めての女性選手を1975年のドラフト1位で指名するのです。

これは現実の話ではありません。

1972年から1977年まで週刊少年マガジンに掲載された、水島新司さんの人気野球漫画『野球狂の詩』の中の話です。

主人公の水原勇氣は日本プロ野球史上初の女性選手。

1977年には当時の人気アイドル歌手だった木之内みどりさんの主演で映画化もされています。

この漫画の舞台が東京メッツの本拠地「国分寺球場」。

この球場を舞台に様々な人間ドラマが繰り広げられるのです。

それは野球という魔物に取りつかれた者たちの群像劇であり、涙なしには読めない濃厚な人間物語です。

水島さんは、「野球狂の詩」への思いについて、1995年に発売された文庫版（全13巻）のあとがきに、「代表作を書かせてくれた源は『野球狂の詩』です」と書かれています。

ここでの代表作とは、「ドカベン」や「あぶさん」などのことです。

1972年に読み切りで始まったこの野球漫画には、最初の4年間は驚くべきキャラクターが次々と出てきました。

文庫本あとがきで水島さんが紹介されているのは、身長198センチ、体重100キロと体格に恵まれ死に物狂いの練習をしているのにまったく目が出ない選手が野球を本当に愛しながらも周りの勧めで新天地を求めて相撲取りになる「一本バット土俵入り」や、逆に、若くして歌舞伎界の将来を背負ってゆくことを囑望されているにもかかわらず、信じられないほどの野球の才能と野球愛を持つ歌舞伎役者の才能を活かすために歌舞伎の上演期間以外限定の野球選手となる「スラッガー藤娘」の2つの話ですが、初期の読み切り時代の「野球狂の詩」に出てくる選手たちのキャラクターは想像を超えるものがあります。

例えば、「はだしの王様」では、ケニアからやってきたサバという選手が知力の高さと人間離れした走塁によって盗塁成功率100%を続けることでチーム全体が走るチームに変化してゆき人気者になってゆくのですが、日本の大気汚染のために体を壊しファンがお金を集めてチャーターした特別機でケニアに帰ってゆくという話が描かれます。

これ以外にも紹介したい話が数多くありますが、水島さんが描こうとしたのは、野球という入れ物の中に入れた人間の業や人情なのだと思います。

「野球狂の詩」が週刊少年マガジンで始まった1972年、水島さんは週刊少年チャンピオンで「ドカベン」の連載も始めます。翌1973年にはビックコミックで「あぶさん」の連載も始まります。

長期にわたり続いてゆく、水島さんの、というよりも日本を代表する三大野球漫画がほぼ同時期に一人の漫画家の手により始まったわけです。

ちなみに最盛期の76年から77年頃は月産で450枚の漫画を描いていたそうなので睡眠時間は3時間状態が続いていたそうです。

それまでの野球漫画、例えば「誓いの魔球」（原作：福本和也、作画：ちばてつや 1961-1962年）、「巨人の星」（原作：梶原一騎、作画：川崎のぼる 1966～1971年）、「侍ジャイアンツ」（原作：梶原一騎、作画：井上コウ 1971～1974年）といったものは、子ども向けの魔球ものであったり、強い巨人軍（1965～1973年まで9年連続ペナントレース優勝）が軍隊的根性や誰も打てない魔球によってさらに強くなったりしてゆくものでした。

こういった野球漫画へのアンチテーゼを水島さんは描こうとしたのではないかと思います。それは、選手のリアルな生活や家族や悩みといったものを野球に絡めて描く、初期の読み切り時代の「野球狂の詩」に最もよく出ています。

水島さんは、文庫版あとがきで「自分で言うのも何ですが、今読み返しても何と面白いことか」と書かれているように、野球という入れ物の中にあるそれぞれのキャラクターの面白さが飛び抜けています。

そして、そこで描かれたキャラクターが生活する背景には、市井を生きる人たちのリアル、もう少しわかりやすく説明するならば、食べて行くためにその日を懸命に生きる他ない人々にとっての希望である野球、その状態を抜け出す手段としての野球選手の夢がそこに

はあります。

水島さんの描く庶民の住まいは粗末な長屋であることが多く、大阪の下町を想起させるものです。

水島さんは、新潟の鮮魚商の家に生まれるのですが、父親の借金のために中学を出て働かざるを得ず、それでも漫画家の夢を諦められずに大阪の貸本漫画出版社の社長宅に下宿させてもらいながら漫画を描き徐々に認められていったという体験から、根底にあるのは大阪の庶民の暮らしや人情、強者ではなく弱者に寄り添うこと、巨人軍ではなく阪神タイガースといったものなのでしょう。

ちなみに、最初期の漫画の原作者は劇作家の花登筐（はなと こぼこ）さんです。花登さんは、「細うで繁盛記」（日本テレビ 1970～1971年）や「どてらい男」（フジテレビ 1973～1975年）などのドラマの脚本で知られているように大阪商人や大阪の人情を描いた人です。水島さんは花登さんを師と仰いでいましたので、水島さんの表現の根底に流れている大阪人情は漫画家としてのキャリアの最初からあったのではないかと思います。

話が少しそれましたので、「野球狂の詩」と国分寺球場の話に戻したいと思います。

第38話「どしゃぶり逆転打」では、国分寺球場特有の風がどのように勝敗を分けるかが描かれています。

「どしゃぶり逆転打」はこのような話です。

阪神を自由契約になった芦田選手が東京メッツの本拠地である国分寺球場に再就職の活動に来るところから話は始まります。

プロ野球選手として阪神球団で10年を過ごし、肩や走力に衰えを自覚していた芦田選手は、次の就職先として自分が好きな国分寺球場のグラウンド整備の仕事を希望していたためです。

芦田選手の国分寺球場での打撃成績は他の球場よりも突出していました。

それは、相性の良い国分寺球場のグラウンドの土や砂の性質、天候などを知り尽くしていたからです。

特に、グラウンドの傾きの差を利用した1塁線上を狙ったバントヒットなど試合を決定づけた頭脳プレーは東京メッツの球団首脳陣にとって忘れられないものでした。

芦田選手と偶然会った首脳陣は、ホームチームの誰よりも国分寺球場を知り尽くす芦田選手を球団職員ではなく選手として契約する決断をします。

東京メッツに拾われた芦田選手は、シーズン開幕戦で、雨上がりの国分寺球場上空に吹く、風向きの子想ができな思われた変化を予測してレフトフライを打ちそれが風の力によってサヨナラヒットとなります。

「己を知り 敵を知り 地の利を知れ」と色紙に書いた芦田選手はこのあとコーチとなり監督の片腕となりました。

データを積み上げて分析し作戦に活かす知性派指導者が（主役として）野球漫画に描かれた最初ではないかと思います。

当時、南海ホークスでキャッチャー兼監督だった野村克也さんと親しかった水島さんが野村さんの影響を受けて描いた話なのかもしれません。

「野球狂の詩」の中の国分寺球場があった場所は恋ヶ窪だと考えられます。

水島新司さんは連載当時、小金井に住んでいて、恋ヶ窪の球場でも草野球をしていたようです。

恋ヶ窪はすり鉢状の地形で確かに窪になっています。国分寺崖線の一部が北側にせり出して谷をなしているのではなく、崖線の北側に別にできた窪地のようです。

ロマンティックな名前のため命名伝説がいろいろあるようですが、崖線の窪地をさすハケのように窪地をさす古語であるコエが変化して恋になったのではないのでしょうか。

いずれにしても、すぐ南側に崖のある窪地ならば強風が吹くと上空の風は上下右左に舞うようになることもあるかもしれません。

国分寺崖線上ならば、東京経済大学の国分寺キャンパスは強風が吹くと風が舞い、風向きが読めないので看板が思わぬ方向に飛ばされたりすることがあるそうです。

もし本当に国分寺球場が恋ヶ窪にあったならば、風が厄介な球場だったかもしれません。

東京メッツの2軍球場と合宿所は小金井にありました。

連載当時、小金井に住んでいた水島さんにとって地元の小金井や草野球チームで試合をやっていた国分寺を漫画の舞台にしたのです。

ちなみに、マンガのなかでは、国分寺駅前にあった洋食店のヨネザワが出てきたり、水原勇気を発見した球団スカウトの尻間専太郎が水原勇気を発見したのが小金井駅北口の線路際だったりするなど、この頃の国分寺や小金井を知っている人にとっては違う見どころもあります。

水島さんの別の野球漫画『一球さん』（1975～1977年 少年サンデー）では、選手の出身高校として「恋ヶ窪商業高校」という高校も出てきます。

「野球狂の詩」の「一本バット土俵入り」で紹介した選手の名前は高円寺三郎、「スラッガー藤娘」で紹介した選手は国立玉一郎など、中央線沿線がフィーチャーされています。

ちなみに、

「野球狂の詩」とはまったく関係ない余談ですが、漫画家のくらもちふさこさんの『おしゃべり階段』（集英社 1979年）という漫画では、主人公の加奈の親友の日野さんを始め、国分寺くん、国立さん、萩窪くん、中野くん、四谷くん、神田くんなど主人公のクラスメートが多数出てきますが、主人公の憧れのひとの名は、中山手線です。以上まったくの余談でした。

『野球狂の詩』の「国分寺球場」のモデルとなったのは明らかに**神宮球場**（明治神宮野球場）だと思います。外見はみごとにそっくりです。

しかし、70年ほど前に武蔵野市にあった、プロ野球の公式戦をわずか16試合行っただけでなくなってしまった、まぼろしの球場のことも**水島新司**さんの脳裏にはあったのではないかと思うのです。

それは、1951年に旧中島飛行機武蔵野製作所跡地に建設された「**東京グリーンパーク野球場**」(別名:**武蔵野球場**)です。

敗戦後の急激な復興の中で、野球人気は高まっていたのですが、当時の日本はまだオキュパイド・ジャパンですから**神宮球場**は進駐軍に接収されたままでした。

東京都内には他に**後樂園球場**しか野球場がなかったため、急遽武蔵野市に作られた球場です。

しかしながら、この収容人員約5万人の悲運の球場は、1951年にわずか16試合のプロ野球公式戦を行っただけで使用されなくなり、1956年には解体され**日本住宅公団**（現在の都市機構）に売却されます。

突貫工事で作られたフィールドと外野スタンドの盛土は保水力の乏しい関東ローム層のため芝は育たず土質の悪い球場だったことに加えて、1952年にはサンフランシスコ平和条約締結により日本の占領が解除され**神宮球場**が解放されます。

続いてすぐに**川崎球場**ができ、**駒沢球場**が整備されると**武蔵野球場**の役割はなくなってしまったのです。

現在は「**武蔵野緑町パークタウン**」という団地の敷地内にダイヤモンドなどの痕跡をわずかにとどめるのみです。

水島さんは、報われない者への共感が強い方なので、この悲運の球場が国分寺の恋ヶ窪にあったらと考えたのではないのでしょうか。

ここまで「**野球狂の詩**」についての話をしながら、この漫画の後半部分全てを占める主人公の**水原勇氣**選手の話をもほとんどしていませんでした。

おそらく世間的には「**野球狂の詩**」=水原勇氣であると認識されていると思います。

水島さんはこのように書かれています。

「毎回楽しい読切りが続き、そして昭和51年に突然ぼくは、水原勇氣という女の子に出会ったのです。乗りまくる『**野球狂の詩**』は何とこの女性を、プロ野球選手にしようと考え、そしてこの“夢”は実現へとあつという間に走り出したのです」(文庫版あとがき「『**野球狂の詩**』の頃」1995年)

水島さんの挑戦は、プロにも通用する女性の野球協約突破でした。

女性のプロ野球選手誕生までの苦難は全17巻の単行本の後半部分全てを占めるほどの道のりでした。

しかも、水原勇氣は自身の才能を知りながらも、獣医学者を目指していたのでプロ野球選手になる気持ちを初めは全く持っていませんでした。

ちなみに、水原勇氣の自宅は小金井で漫画の絵から推測すると線路が見える北側の住宅地で、高校は武蔵野高校となっています。このあたりに住む人からすると、武蔵境にある都立武蔵高校や日本獣医生命科学大学がどうしても頭に浮かんできてしまいます。

岩田鉄五郎の気迫や人間的魅力によって考えが変わり、獣医学者を目指す前にプロ野球選手としてのチャレンジをすることになった水原勇氣には、偏見や体力差の問題など様々な困難が襲い掛かってきます。しかし、彼女の文字通り血のにじむ努力によって野球協約は書き換えられ女性初のプロ野球選手が誕生しこれからというところで物語は終わります。

しかし、この水原勇氣編に現代の読者はついていけないところがあるのではないかと思います。

それは水原勇氣が女性初のプロ野球選手になることに反対する半世紀前の男性たちの考え方や行動です。

女性としてはとといった留保なしに類まれな野球の才能と深い愛情を持つ水原選手なのに、女性というだけで必要以上の反対をする男性選手が他球団のみならずチームメートのなかにもいるのです。

同じ年にドラフト1位で阪神タイガースに入団する沢村選手からは、水原選手は沢村選手を何とも思っていないにもかかわらず、執拗に野球選手なんて辞めて自分の奥さんになった方が幸せになれるといったしつこいアプローチを受けるということもありました。

水島さんが描いたのは、この時代の現実に対してどのように女性プロ野球選手第1号を突破させるかということだったのですが、今の時代の価値観からするとかなりまずいことも描かれています。

しかし、実際に現在の日本でどれだけ現実が50年間で変わったのでしょうか。女子プロ野球選手を女性管理職や女性政治家といったものに置き換えるとほんの少し進んだかといったことでしかないように思えてなりません。

水原勇氣が出てくるようになってからの「野球狂の詩」は、それまでの野球の通向けのファンからファン層を大きく広げることになり、1977年には当時19歳の人気アイドルだった木之内みどりさんの主演により映画化もされヒットします。

1977年に国分寺に住んでいた多摩美術大学2年生の竹中直人さんも映画「野球狂の詩」をおそらく見ていたのではないかと思います。それは、この映画の13年後に木之内みどりさんと結婚されることになるからです。

ちなみに、漫画の中では1976年に女性のプロ野球選手が誕生しますが、現実でも199

1年に漫画と同様に協約の項目削除というかたちで女性のプロ野球選手が認められることになります。

これ以外にも、水島さんの野球漫画には、その後に現実となることが多いことに驚かされることが多くあります。

例えばそれは、2012年の夏の全国高校野球選手権大会第2回戦での熊本・済々黌高校と徳島・鳴門高校の試合での、済々黌高校による信じられない頭脳プレーです。

済々黌高校が1点リードで迎えた7回ワンアウト一、三塁のチャンスで、打者が打ったライナーをショート（遊撃手）が見事にキャッチします。ボールは一塁へ送られ、一塁走者もアウトとなりました。しかし、ここで、無得点でチェンジとなるはずが、スコアボードには得点「1」が入ります。納得できない方も多くいらっしゃるかもしれません。

実は、三塁走者はライナーで飛び出したのですが、一塁のアウトより早く本塁に達していました。野球のルールブックに記載されているとおり、鳴門高校はここでボールを三塁に送って「第3アウトの置き換え」をアピールする必要があったのです。しかし、鳴門高校の選手たちはこのルールを知りませんでした。

済々黌高校の選手たちは、同じ状況で得点が入ることがルール上可能になることを水島さんの「ドカベン」を読んで知っていたので実践したと話していました。

他にもリリーフ投手が1球も投げずに勝利投手になること（現実にもあります）など、水島新司さんの漫画は、野球というスポーツのルールの極限までの理解がもとになっています。また、高校野球だけでなく、少年野球、女子野球、大学野球など日本の全ジャンルの野球を描くという意味でも水島さんの野球への愛情と深い認識はすごいとしかいえません。

ちなみに、これも水島さんの代表作である「男どアホウ甲子園」は、主人公が高校での活躍後にまさかの東大に入学し6大学野球で活躍しプロになる姿を描いていますが、私はこれ以外に大学野球を描いたマンガを読んだことがありません。

2000年から雑誌連載が開始された、続編『新・野球狂の詩』では、球団買収による東京メッツの国分寺から札幌への本拠地移転騒動が描かれます。

半世紀の間ファンや選手たちから愛された国分寺球場を離れるぐらいなら引退するという老将岩田鉄五郎が、最終試合での観客の声援の力によって札幌に行くことに心を決めた回は感動的です。

国分寺は離れるときになると急に強い愛着がじわじわと湧いてくる街なのではないのでしょうか。

今回は時間に余裕がありますので、最後に国分寺と漫画、アニメの関係について少し話したいと思います。

国分寺が漫画やアニメのまちとなるのは、**ゴルゴ13**などで知られる**さいとうたかお**さんが1958年に大阪から上京して国分寺に住んだことから始まるようです。

その2年後1960年には、それまでだれもやっていなかった、分業体制によって漫画を制作するプロダクション方式を導入します。この「さいとう・プロダクション」には、のちに「フーテン」、「漫画家残酷物語」などで知られる**永島慎二**さんや、「巨人の星」、「いなかっぺ大将」の**川崎のぼる**さんが作画チームに所属しています。

さいとうプロは、雇用関係がしっかりしていて給与条件もよかったため優秀なスタッフを抱えてゆくこととなります。

さいとうプロのスタッフは、国分寺駅北口の名曲喫茶「**でんえん**」に入り浸ることが多く漫画についての議論を戦わせたこともあったようです。

永島慎二さんの「**でんえん**」での微笑ましいエピソードを紹介しましょう。

永島さんは、「**でんえん**」の若いスタッフの女性に一目ぼれをして仕事仲間を誘ってしょっちゅう通っていたのですが、その後、その女性と結婚して阿佐ヶ谷にお住まいになったそうです。

ある時期の国分寺駅周辺は漫画やアニメといった視点から見ると、いわば「**多摩のときわ荘**」といってもよいような、のちに大きな仕事をするクリエイターたちがいた場所だったのかもしれない。

北口のさいとうプロに対して、南口には**タツノコ**プロがありました。

1962年に小岩から国分寺に移ってきた**吉田竜夫**さんは、弟の**健二**さんと**豊治(九里一平)**さんの3人に加えて、**笹川ひろし**さん、**望月三起也**さんらのクリエイターたちと、さいとうプロにわずかに遅れてプロダクション方式での分業での漫画制作を開始します。

タツノコプロは、ほどなく**手塚**プロによる「**鉄腕アトム**」に続く黎明期のアニメ制作に乗り出します。

「**マッハ GoGoGo**」(1967~1968年 フジテレビ)などの緻密なメカとバタ臭い人物や背景などのアニメは広く受け入れられ、「**科学忍者隊ガッチャマン**」(1972~1974年 フジテレビ)や「**昆虫物語 みなしごハッチ**」(1970~1971年 フジテレビ)などのヒットにより、アニメの**タツノコ**プロは広く知られるようになります。

しかし、社長の**吉田竜夫**さんは1976年に45歳で若くして亡くなります。

この頃、事業拡大のさなかであり、スタッフを募集していた**タツノコ**プロの求人案内を、一橋学園駅前の電柱で見て応募したのが**押井守**さんでした。

押井さんは、東京学芸大を卒業し就職したばかりでしたが、勤務していたラジオ番組の制作会社が潰れてしまい、学生結婚をした奥さんもいたので中学校の図工の先生になろうとして応募書類を友達に郵便局に出すように預けたところでした。

しかし、この友人が書類を出し忘れてしまい、下を向いて一橋学園駅の前を歩いていたとこ

ろタツノコプロの求人を見つけたのです。

押井さんは入社するとすぐに演出の実力を発揮し、「ヤッターマン」(1977～1979年 フジテレビ) シリーズの演出で認められることになります。

その後の押井さんの活躍は説明するまでもないと思いますが、1995年に「攻殻機動隊」によって世界で認められます。この「攻殻機動隊」を制作したのは、タツノコプロから独立した石川光久さんと後藤隆幸さんによって1987年に設立された「プロダクションI. G」でした。

その後、北口のさいとうプロは中野に移転しています。

タツノコプロも2010年に三鷹に移転します。同じ年に、国分寺南口のタツノコプロの近くにオフィスがあった「プロダクションI. G」も三鷹に移転しています。

ちなみに、国分寺を離れて三鷹に移転した「プロダクションI. G」の石川光久会長には、ほぼ毎日昼食に食べていた「一乃屋」の鴨汁うどんが同店閉店のため食べられなくなったから国分寺を去った、という都市伝説が当時ありました。

本当に石川さんは毎日のように鴨汁うどんを食べていて、接待の場としても「一乃屋」を使うほどで、国分寺都市伝説としては、クエンティン・タランティーノ監督が2003年公開の「キル・ビル」の中で使うアニメーション制作を依頼するために単身、アポなしで国分寺まで来たときにも鴨汁うどんを接待したという話もありますが、これはさすがに本当のことではないと思います。

今回はこのへんで終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

これで「国分寺1976」第4回「まぼろしの国分寺球場」を終了します。

ご意見や感想などありましたら東京経済大学地域連携センターまでメールでお願いします。

次回、第5回は、「居場所を求めた若者たち」というテーマでお話しする予定です。

お相手は、ライターの近松佐左衛門でした。

最後までお聴きくださりありがとうございました。

次回もお楽しみに。

第4回終了

出演:近松佐左衛門

録音:株式会社モジュール

編集:GO ARAI

ジングル作成・BGM作曲・演奏:GO ARAI

【参考文献】

- 『野球狂の詩』単行本 1～17 巻（水島新司著 講談社 1973～1977 年）
『野球狂の詩』講談社漫画文庫全 13 巻（水島新司著 講談社 1995 年）
『新・野球狂の詩』全 12 巻（水島新司著 講談社 2005 年）
『水原勇氣0勝3敗11S』（豊福きこう著 情報センター出版局 1992 年）
『岩田鉄五郎 204 勝 404 敗 8S—『野球狂の詩』超記録大全』（豊福きこう著 メディアワークス 2001 年）
『東京コンフィデンシャル—いままで語られなかった、都市の光と影』（高瀬毅著 榎出版社 2003 年）
『武蔵野市百年史 記述編Ⅱ(昭和 22 年～昭和 38 年)』（武蔵野市 2002 年）
『雑草魂 石川光久 アニメビジネスを変えた男』（梶山寿子著 日経 B P 2006 年）
『世界の子供たちに夢を～タツノコプロ創始者 天才・吉田竜夫の軌跡～』（但馬オサム著 メディアミックス 2013 年）
『男どアホウ甲子園』全 28 巻（原作：佐々木守、作画：水島新司 小学館 1970～1975 年）
『ドカベン』全 48 巻（水島新司著 秋田書店 1972～1981 年）
『中央線の詩 上』（朝日新聞東京総局 朝日新聞社 2005 年）
『他力本願 [仕事で負けない7つの力]』（押井守著 幻冬舎 2008 年）

[ウェブサイト]

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~mangaya/site2.html>

以上